# せんだい寸景

NO1　2004年8月
発行：じっかい電脳事務局

## 墓参好日　木下・薬師堂界隈

仙台の東郊・白萩町に国分尼寺という古寺がある。その墓地に武田義郎の墓があって祥月命日など気のむくまま墓参するのだが、決まって先客があって花束、供物がある。漏れ聞くにその主は当の未亡人ではないらしい。

武田は在校中柔道部に属し、応援団でも活躍した。足の早いのが自慢で運動会では短距離の覇者だった。なによりこいつ、「目立つ」ことにこだわった。当時の写真をみるとかならず中央に収まっている。亡くなる2年前に出演したNHK全国のど自慢（宮城県田尻町から中継）でもやっぱり「中央」に陣取り、「プロ歌手をめざしたんだけど、こんなマスクなんであきらめました」なぞとホラをこいていたっけ。

薬師堂仁王門　「奥の細道」の旅で芭蕉が訪れたのは元禄二年（1689年）のことである

国分尼寺からほど近く大きい森のなかに薬師堂がある。我がじっかい生の中に「逢引き」につかったものもいるらしい（名前は忘れた、ハッハッ）この周辺が目に見えて変わりつつある。民家が買収され広場が拡大、なかでも聖和学園が薬師堂をはさんだ北東部の旧国鉄鉄道学園跡に移転した。聖和はさらに西多賀の丘陵にあったNTT学園跡に男女共学の高校を開校した。薬師堂・仁王門の隣にあった旧校地は仙台市が買い取り解体中でやがて一帯は陸奥国分寺史跡公園に姿を変える。そしてJR貨物線のわきにはいずれ着工する仙台市営地下鉄東西線（八木山と六郷を結ぶ）の駅が予定されている。聖和前の広い木下通りは東に延び大和町を経て国道4号仙台バイパスにつながりけやき並木が美しい。かつての静かな住宅街も表通りはこぎれいな商店街と化した。一面田んぼ、畑が広がり畦にはカエルがはねていた往時を語ったところで若い買い物客など信じまい。

雪が舞う葬送の日一高柔道部師範武田が育てた門弟たちの号泣に包まれた国分尼寺に今せみしぐれが降り注ぐ。

武田義郎が没して七年。いまなお毎月の命日に墓参を欠かさぬかのひととはなにものだろう。墓前にたたずみ「ギロー、おめってやつは」ただ感嘆するばかりだ。

ちなみに法名は
是好院義堂真徹居士
命日　平成九年十一月二十八日　享年五十九才

武田家の墓と背中合わせに塩沢信行（山岳部）のご両親の墓があり（ついでに）手を合わせるのだが、こちらには「アヤシイ」ことはなにひとつおこらない。

国分尼寺の奥に「和賀忠親主従」8名の墓所がある。岩手・和賀の領主和賀忠親は一揆の首謀者の嫌疑をうけ伏見に上る途中の慶長六年（1602年）五月　家康の命により宿泊中のこの寺で従う家臣共々自決したという。

日本中どこもかしこも同様だろうからいまさら驚くことはあるまいが、それにしても仙台はなにもかもが変わった。とはいえ、なにより変わったのは「ひと」さ。おのれ自身の変わりように驚かぬ者はおるまい。たまにムカシの自分に会いに出かけてみませんか。